

学会長メッセージ No. 10

「事例を通して描かれる患者さんとの出会いと看護師のありよう」

1月22日の大雪から一週間経ちました。  
凍った雪の上を渡る風が冷たく、寒い日が続いています。  
今朝、道路を歩いていると日中、溶けた雪の水たまりがあちこちに凍っており、  
子どものころのようにツーツと滑って楽しみました。

日本慢性看護学会では事例研究を大切にしているのですが、  
教育講演でご登壇いただく黒江ゆり子先生の論文に次のような箇所がありました。

看護学における事例研究とは、

1. 個人・家族・組織・地域などそこで生きている人々の現実が描かれていること
2. その現実に看護師が専門職者として、一人の人間として関わり、苦悩しながらも支援している現実があること
3. それらの現実から人はどのようにそれを支援するのが、洞察されていること

とありました。

また、当学会の理事である川村佐和子先生の著書『難病患者の在宅ケア（1978）』  
について、次のように紹介されています。

*医療的ケアを受けながら地域で生活をするひとと、その療養生活を支える実践過程と、  
専門職者と地域の人々の姿が描かれている。*

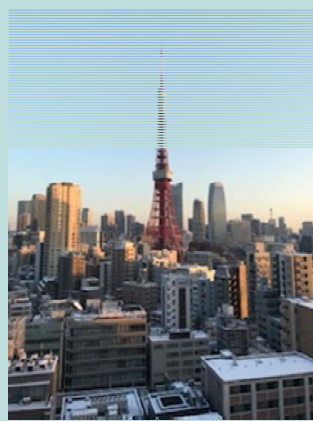
（黒江ゆり子：時間的経過を踏まえた看護学における事例研究法の意義に関する論  
考，看護研究，2013）

この論文を読んで、人の生き方、支援の可能性とそのあり方を事例研究は描くこと  
ができるのだと、感動したことを覚えています。また、看護は一つの出会いであ  
り、患者さんへのケアを通して看護師のありようを描けるのだと思いました。

2018. 1. 29 東 めぐみ



雪の降る日の東京タワー



雪が積もった朝の東京タワー



雪だるまと BB エイト

